



2017年度 防災教育チャレンジプラン

崇城大学 SCB放送局



2017年度 防災教育チャレンジプラン 崇城大学 SCB放送局

* 本事業の終了は、2月末日を予定しているため、本報告書は、1月末現在の状況をまとめたものです。

■はじめに

当初、私達のプランは、熊本地震で起きていた様々なドラマを取材し、それらを元に、ラジオドラマを制作する予定でした。取材を通して様々なエピソードを収集し、その中から、災害時に役立つであろう事柄をピックアップして制作したラジオドラマを共有することで、防災意識の向上が期待できると考えていました。

しかし、震災から1年以上が経つ中で、熊本市内では、防災をテーマにしたイベントは数多く開催され、「参加者が減っている」「同じようなメンバー”が”同じようなテーマ”で集まる」など、主催者や行政へのヒアリングを通して、防災意識向上のための取組みをどのように実施すれば良いか、ということについて課題意識があることがわかりました。

そこで、当初予定していた”手段”に固執することなく、参加メンバーたちとの対話を通して、「震災から1年が経ち、防災意識はどのように変化したのか？」を徹底的に議論することとしました。その中で出て来た参加者からの意見の一部を紹介します。

<メンバーからの意見（一部）>

- ・地震は体験したが、被災直後に実家に避難したので、大変だったという意識はない。
- ・かなり揺れて驚いたが案外大丈夫だなと思った。
- ・被災したことで防災への意識にさらに開きが出る可能性もあるのではないかと？

これらの話を通して、共通の体験があっても受け取り方やその後の行動には、個人個人で大きな違いがあることをメンバー同士で共有することが出来ました。

これらの議論を通して、ターゲット、目的、テーマ、描き方などをもう一度、メンバー間で議論することから開始しました。

■ターゲットと目的の整理

私達のプランでラジオドラマを作ることは決まっています。そこで、①ラジオドラマをどんな方に聞いてもらいたいのか、②聞いたことによってどんな行動変容を促すことが出来るのか？の二点について、整理をしました。

熊本地震の体験を共有したにも関わらず、その受け取り方は様々であり、それらすべての方をターゲットにするのは現実的でない、と考え、まずは、「どんな方に聞いてもらいたいのか？」について議論しました。

私達は、「体験」と「変化」に着目して、以下のように市民を分類しました。

①熊本地震を体験して、防災意識が変わり行動を起こす人

- ②熊本地震を体験したけど、防災意識が変わらない人（行動も起きない）
- ③熊本地震を体験していないけど、防災意識が変わった人（何かしらの行動を起こす）
- ④熊本地震を体験していないし、防災意識も変わらない人

この①～④のうち、②と④を対象から外しました。私達のターゲットを③の方としました。「熊本地震を体験していない」つまり、「熊本の人ではない」、ということ、さらに、仮にその地域で災害がおきた時に「何か行動を起こすであろう人」です。

これらの整理により、私達が制作したラジオドラマは、「熊本以外の場所で聞けること」が必要になり、その中で、「災害がおきた時に防災意識が変化して行動を起こす（可能性のある）人」に働きかけることが必要であるとしました。

■行動変容のために何をするか？（*参考資料パネル2参照）

次の議論は、防災意識が変化しそうな人へ、どのように働きかけるか？という点でした。

そこで、先の整理の①に該当する方に、インタビューをしました。実際に行動が変化した人の中で、何がおきたのか？という点を確認することを目的として、一般社団法人よか隊ネット事務局の土黒（ひじくろ）功司さんにインタビューをしました。

土黒さんは、システムエンジニアとして働いていましたが、震災をきっかけに、被災者支援の活動を開始します。ご自身は比較的被害も少なかったという点はあるものの、関わっていた地域で困っている人を見たり、仕事仲間が被災者支援を始めたり、いくつかのことが重なり、被災者支援の活動を行っていることがわかりました。それだけでは、周囲の状況、自分の状況、周囲からの誘い、という点での行動変容でしたが、インタビューの中で、土黒さんが個人的に手伝っている方がいることを知ります。

それが、阿蘇の鯨伝説と活断層の関係に着目して、1人で被災地を巡って取材をして、企業等からお金を集めて、取材内容を「local media 3」という冊子にしている澤田佳子さんでした。

土黒さん自身も被災者支援の活動をする中で、複数の方から澤田さんのお話を聞いていました。そのため、澤田さんの活動に興味を持っていたようですが、澤田さんと出会ったことで、土黒さんは、澤田さんの活動を手伝うようになります。

その理由について、土黒さんは、①澤田さんの活動に興味を持っていたこと、②話を聞いて共感したことが、きっかけだったと説明しました。そこから私達も“共感”を1つのキーワードとして取り込んで行くことを決めました。

■共感によって起きる変化（*参考資料パネル2参照）

続いて、私達は、澤田さんにもインタビューを行いました。澤田さんは、もともとは関東在住の編集者で、東日本大震災をきっかけに、熊本へ移住しています。熊本での暮らしの中で、様々なテーマ、切り口で、独自に取材した内容を冊子にまとめて販売している方です。

澤田さんが、熊本地震を体験した中で、ある方に教わった「阿蘇の鯰伝説」のお話と活断層の関係について調査し、鯰にまつわる伝説のある場所を巡りながら、そこで出会った人たちに、熊本地震の体験を語ってもらう、という冊子を作られていました。

澤田さんがそれらの活動を行ったきっかけや、そこで取材した方々のお話を聞くと、メンバーの中でもその内容に興味を持って何か手伝えることがないか？という意識が芽生える、ということがあったり、冊子には入っているたくさんの企業や店舗の広告も、澤田さんの活動そのものに共感して協力してくれる、という説明していました。

私達は、澤田さんと土黒さんのインタビューを通じて、

- ①活動を見せることで共感が集まること
- ②共感が集まることで行動変容が期待できること

以上、2つについて、確認をしました。

■共感には何が必要か？

私達は、共感の有用性については可能性を感じつつも、そのためには何が必要か？ということについても議論をしました。

結論としては、発信側が行えることは「興味が湧く物語」として発信できるよう目指していくことが必要だと感じました。そこで、今回のラジオドラマでは、澤田さん自身が、阿蘇の鯰伝説と活断層の關係に着目して興味を持ったことになぞらえて描くこととしました（詳細は後述）。

また、もう1つ、受取側についても「共感がおきやすい状態」を作ることが出来ないかと考えました。そこで、参考にしたのが、以下のページです。

休暇をとってデジタルから「非接続」になると、創造性を取り戻せる：研究結果

<https://wired.jp/2011/01/20/%E3%80%8C%E8%B7%9D%E9%9B%A2%E3%80%8D%E3%81%A8%E5%89%B5%E9%80%A0%E6%80%A7%EF%BC%9A%E4%BC%91%E6%9A%87%E3%81%8C%E5%A4%A7%E5%88%87%E3%81%AA%E7%90%86%E7%94%B1/>

一部抜粋

CLTでは、「距離的に近く感じられる」物事ほど、具体的かつ文字通りの意味で思考され、一方、「距離的に遠く感じられる」物事ほど、より抽象的に思考することが可能になるということを基本的な前提にしている。

「距離が遠いことをイメージしながら考えること」は、想像力に優位に働くのではないかと考えました。そこで、ラジオドラマ完成後には、熊本から離れた地で、ラジオドラマを放送すること、熊本と他地域で、防災意識にどれだけ有効に働きかけられるかを検証することとしました。

■ラジオドラマの内容について

ラジオドラマは、神話パートとドラマパートの2つに分けることとしました。

神話パートは、阿蘇の鯨伝説を、昔話のような物語として、ラジオドラマ冒頭付近に入ります。これは、ラジオドラマ全体への興味を持ってもらう為の演出として考えました。

(*1月末段階では、ここまでが終了しています。後半のドラマパートは現在制作中です)

後半は、熊本地震から50年経った設定です(2月末完成予定)。

～あらすじ～

熊本在住の大学生2年生の早良ゆうこは、祖母の話聞くのが好きな子です。

来年から始まる就職活動の前に、家族で阿蘇にドライブに出かけると、祖母は「ここに昔は橋があった」などと思い出話をし始めます。ゆうこ自身も、小学校の時に地域の歴史を学ぶ授業の中で、VR等で熊本地震の時の熊本市内の様子などを学んでいたこともあり、知識として地震があったことは知っていました。

祖母は続けて、阿蘇の鯨伝説についても話しました。

3年生になったゆうこは、卒論のテーマについて考えています。そこで、昨年末に亡くなった祖母の話思い出し、阿蘇の鯨伝説と熊本地震について調べることにしました。

ゆうこは、鯨にまつわる伝説を頼りに、最も被害の大きかった益城町から、阿蘇を目指します。そこで、出会った人たちは、50年前の熊本地震を体験した人たちの孫たちでした。

話を聞いてみると、50年前の熊本地震の話、阿蘇の鯨伝説、それらを地域学習で学んでも、その2つを結びつけて考えていた人はいませんでした。

ゆうこは気づきます。地域の神話には、私達が気づかなかったその土地の歴史が隠されているのではないかと。想像力で時間や場所を飛び越えることが出来れば、50年前の熊本に暮らした人たちの行動が、少し変わっていたのではないかと。

空を見上げると、神話の時代から変わらない星空がそこにあった。

■「共感」と「想像力」が防災意識向上のカギ

私達は、約1年ほどの活動を通して、防災意識を持ってもらいたい、意識を向上してもらいたい、そのためには何が本当に有効なのか？を徹底して考えて来ました。共感と想像力の2つのキーワードに辿り着くまでにそれなりに時間がかかり、加えて、その2つのキーワードをラジオドラマに落とし込む作業も相当に苦労しています。

すでに、いくつかのグループには、ラジオドラマの存在を明かす前に、防災意識アンケートを実施しています。今後、ラジオドラマが完成した後に、もう一度防災意識アンケートを実施し、そこに変化が生じるのか、または、生じないのか、を検証していく予定です。最終報告書でアンケート結果について報告していきます。

また、それとは別に、地域の神話等に興味のある層は、地域への意識も高いので、地域の中で、防災教育等を行う上では、ターゲットに成りうると思っています。

今回のラジオドラマでは、地域の歴史や文化に関心のある層が興味を示すような内容を目指しました。その方々が、同じ様に地域の防災等への意識を持つことで、安全安心な地域を地域住民が作れる地域社会づくりのきっかけになるものと考えています。

参考資料

- ・ 2018年11月18日開催
電子情報通信学会100周年記念九州大会で展示したパネル
- ・ 神話パートシナリオ



2017年度 防災教育チャレンジプラン 崇城大学 SCB 放送局

2016年度メンバー：後藤 岳仁、島内 裕章、緒方 将徳、石原 笙、大茂 佳南子、尾崎 沙良、川形 尚生、河野 裕允、後藤 丈典

2017年度メンバー：明石 紘征、末継 嵩浩、磯崎 大登、入江 健太、長南 駿、前田 瑞樹、松田 一郎、森田 和志、中村 美貴

防災教育チャレンジプランは、全国で取組まれつつある防災教育の場の拡大や質の向上に役立つ共通の資産をつくることを目的に、新しいチャレンジをサポートする取組として実施しています。2017年度は、全国19の団体が取組んでいます。

STEP1

課題：取組や活動が広がらない

2017年3月に開催された「地域防災実践ネット座談会」にて、複数の方が同じコメント。その理由について重ねて議論をした。

仮説：防災意識の高い人とそうでない人 認識の格差があるのではないか？

熊本震災を通じて意識が変わった方、新しい取組を行った方、また、それらを応援している方にインタビューをして、どのような変化があったのかをヒアリングした。

STEP2

STEP3

「共感」で格差を埋めることを目指す。

インタビューを通じてわかったのは、同じ体験を通じて起きた共感の広がり。そこで、そのエッセンスである「共感」を起こすための手段とした、ラジオドラマの制作を行う。



STEP4

インタビュー：鯨伝説と活断層

雑誌「local media 3」の編集人、澤田佳子さん、よかたいネットで被災者支援を行う土黒功司さんにお話を伺う。

阿蘇地域に伝わる鯨伝説の場所と活断層に関係があるのでは？
そのような地域の方の声を元に被災者へのインタビューを行う。

鯨伝説の残る場所と活断層の関係

澤田佳子さん



local media 3

インタビューの様子。右奥が土黒功司さん

鯨伝説をリサーチしてラジオドラマの制作を開始。

ラジオドラマは、熊本地震から50年経った未来の熊本を舞台とする予定。

～あらすじ(予定)～

鯨伝説を調査する大学生が見つけた「local media3」、50年前の熊本震災と鯨伝説の関係に着目して、その時の被災地を巡って取材する。

大学生が取材したのは、澤田さんが取材した方々のお孫さん。

幼い頃、祖父や祖母に聞いた熊本震災はどのように語り継がれていたのか。



STEP5

プロローグ：阿蘇の鯰伝説

阿蘇地域に伝わる鯰伝説をラジオドラマ化。世界でも類を見ない阿蘇の巨大カルデラにまつわる逸話。このラジオドラマの導入となる部分です。



これからの予定：制作と評価

ラジオドラマの完成は、2018年1月を目指しています。その後、ラジオドラマを多くの方に聞いて頂き、防災意識の変化についてリサーチする予定です。

STEP6

*2018年1月下旬～2月上旬に、アンケートを実施する予定です。そこで、ご協力頂ける方を募集しております。ご協力頂ける方は、以下のお問合せまで是非ご連絡くださいませ。

お問合せ
担当：小保方

崇城大学 SCB 放送局新市街スタジオ内
崇城大学 SCB 放送局

〒860-0803
熊本県熊本市 中央区新市街 4-7
☎ 096-327-8458 obokata@conceptlab.jp



■神話パートシナリオ

ナレ：この物語は、古くから阿蘇に伝わる神話です。

～SE～

ある日、神武天皇は筑紫島（ツクシノシマ）、
今の九州を統治したいと思いました。
神武天皇は思い立ったら行動する派だったので、
孫である健甕龍命を呼んでこう言いました。

神武天皇：健甕龍命（たけいわたつのみこと）よ、
わたしは筑紫島を統治したいが、
自分で行くのは面倒だ。
代わりに行ってきてくれないか。

健甕龍命：承知しました。すぐに統治して参ります。はあ…。
(面倒臭いな～、行きたくないな～みたいな感じ)

ナレ：命は渋々、付き人と共に筑紫島を統治しに行きました。
初めは乗り気ではなかった命でしたが、
日向の平定があまりにもうまくいったので、
テンションが上がっていました。

健甕龍命：いや～、思いのほかうまくいったな。

お付きの人：そうっすねー。

ナレ：草部から阿蘇に向かう途中、
命は、綺麗な湖を見つけます。

健甕龍命：ん？あの綺麗な湖はなんだ！？

～SE～ 走る音、複数人

健甕龍命：ん～、なんと広大なことか。
そうだ、この湖の水を抜いて、
この土地を田畑として使わせよう。

ナレ：命は湖のほとりに立ち、近くの山を蹴破ろうとしました。

命：おらぁっ～！

～SE～ 崩れない音

命：いって～。なんだよ、ここずいぶん固いな。

ナレ：蹴り破れなかった命は、別の場所に移動しました。

命：え～い！
(どーん)

～SE～ 崩れる音、水が流れる音

(水の流れが止まる)

付き人：あれ？水が止まりそうですよ！

命：ん？何かが引っかかっているぞ

命&付き人：…な、なまず？！

ナレ：水を止めていたのはこの湖の守り神の大ナマズでした。
それを見た健甕龍命は邪魔をしたナマズに
腹を立てました。

健磐龍命：おい！そこの大ナマズ！
邪魔だ、さっさと出て行け！
出ていけないのなら切り刻むぞ！

ナマズ：ひえ～！

～SE～ 水の流れに乗って逃げる大鯰

ナレ：突然のことに大ナマズは驚き、一目散に逃げて行きました。

～SE～ 水の流れに乗って逃げる大鯰

しばらく逃げるとナマズは集落にたどり着きます。

ナマズ：ふう…助かったぁ～

ナレ：ナマズがそう思ったのもつかの間、
ナマズは集落の人々に取り囲まれてしまいます。

集落の人々：いけー！× 5

ナレ：ナマズは訳も分からぬまま、
掛け声とともに襲いかかってきた人々に、
6つに切られてしまいました。

切られたナマズは集落の人々が
美味しくいただきましたとさ。

補足：（一度目に挑戦したところは山が二重（ふたえ）になっており、以後、その場所は「二重（ふたえ）の峠」と呼ばれるようになりました。その後、別の場所で見事に蹴破ることが出来ましたが、そのはずみで命はしりもちをついてしまい、「立てぬ」と叫びます。以後、その場所は「立野」と呼ばれるようになります。）

（切られた場所は、鯰、切られた鯰を運んだ場所は、六嘉と呼ばれています。）
→本編に組み込む。